

■（９７）記者の服装は校則無し？

背広、ジャケット、ジーンズ、綿パン…。事件現場や記者会見場に集まる記者の服装はさまざまだ。公務員よりはラフだが、ＩＴ企業の社員に比べると堅いという感じ。新聞もテレビも、そんな格好の記者が少なくない。

二十数年前の記者１年目、「制服」はジーパンにポロシャツだった。警察担当で、いつでも事件や事故、災害の現場に行けるように、というのが理由だった。取材用の車には長靴を常備し、レインコートも用意しておいた。傘をさしながらメモをとることはできないからだった。

勤務していた山陰地方は、集中豪雨の連続だった。ちなみに、「集中豪雨」という言葉は、１９５３年８月１５日の朝日新聞夕刊（大阪本社発行）が初めて使ったとされる。データベースを引くと、関西地方の豪雨の記事で「木津川上流に集中豪雨…」とある。最近の報道や天気予報では、「ゲリラ豪雨」という表現も登場するようになった。

さて、服装問題。役所担当なら背広、スポーツ取材はラフな服装、と現場に応じて替えるのが通常だ。話を聞き出すには、不快感を与えないことも大切な心がけですから。

（山）